

谷でもないのに岩の上をきれいな水が流れていて、その横には人が入れる岩穴があった。三峰の村とそっくり、南の方が開けていて、三方を北風から守ってくれるいい場所やったんで、かくれ住むことになった。

それからここを『おんばのふところ』と呼ぶようになった。

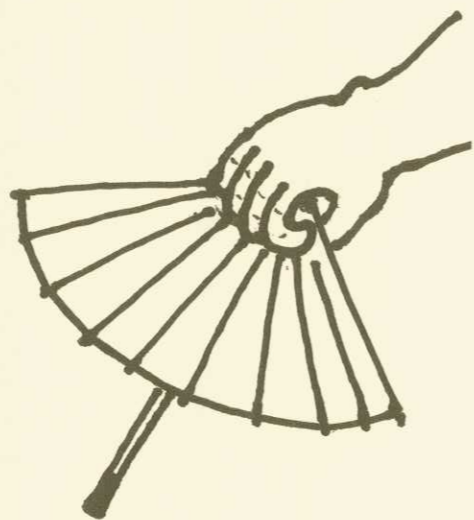
しばらくおんばのふところに住んだけど、ここは南の方が味真野まで見える見はらしのいいところじゃ。

敵に見つかりやすいんで、もっと東の方のくぼんだ谷に移ったんやと。

そして、お供の中に刀を作る者がいたもんで、みんなでかまやくわを作って、だんだんに村の人と仲良うなって、山を下りたんやと。

かじやをしたところは「かんじや清水」って言うてちよつと平とうなつて、今でも谷水がちよろちよろ湧いているんや。

59 狩原の大入道



「おい、狩原ってどこか知ってるか。」

「別司から赤坂へぬける山とこやろ。」

「ほや、おととい、あそいでおっころしい目におうたぞ。」

「大入道か。」

「うん、赤坂のばあさんを見舞に行ったら帰りが晩になってしもた。その時出よったんや。うしろからな、から傘のてっぺんつかまれて、べつにもいっつもならん。ふりむいて目でもおつてみいな、なにされるやわからん。雨ん中迷たわ。わやくさや。あそこは一人で通るもんやないぞ。」

「いつも来てる郵便のあんちゃんも、こないだおうたんやと。」

「本当か。」

「ほや。急ぎの用で、晩方小坂のお寺に手紙とどけに来たんやな。ほしたら出たそつや。相手が若いもんやさけ、大入道め『すもつ取ろつ』。『つていつたんやと』。」

「ほんどぶじつした。」

「うん、『今は急いでるわけ帰りがけに取るわ。』ってうたんやう。」

「へえ。」

「ごえんさんに手紙わたしたら、『顔色が悪いが、どうしたんじゃ。』ってきかれたと。わけしゃべったらな、ごえんさんが、『このせんさま一ぶく食べていきなはれ。』って出してくれた。ごせんさまよばれてもどつて来たら、やっぱり大入道は待ってた。ほやけど『今夜はすもう取らんぞ。お前には仏さんがぎょうさん付いてるぞな。』ってゆつたよ。」

そつらい べったり うしのくそ

おわりに

平成十一年春に、ものづくり、まちづくり、くらしづくりの三つの部会を持つうるしの里づくり協議会が発足しました。

くらしづくり部会の中の歴史・口碑グループは、十三年から地区の伝承を集めて、記録する作業に取りかかりました。

まず「河和田村誌」（昭和十二年）の口碑伝説を手がかりに、地区の方々にお話を伺ったり、現地を見に行きました。

「回想・河和田の里」（昭和五十四年）、「片山町誌」（昭和五十三年）、「上河内町抄史」（池田清治）や「河和田地区老人クラブ連合会二十年史」（昭和五十六年）および「鯖江今昔」（昭和五十六年）や「語りぐさ鯖江」（平成七年）、また「南越」「若越」（昭和三十年～）、「ふるさと」「ふるさと鯖江（昭和五十三年～）」などの機関誌に掲載された話や古記録から、かなりのものを集めることができました。

これらの伝承は、長短さまざまです。語り継がれていくうちに、自由に羽をのばして、別の話とむすびついたりしています。池から出現した黒仏さまのように、まさかと思われる話の中には、ありのままには語れなかった史実が隠されていたりします。また大長兵衛の話のように、薪をとりに行った山が殿上山と向かい山と、擬宝珠の石をのせた場所が江州と奥州と二つの説があるのです。後者のほうが正しいような気もするのですが、すでに活字になって人口に膾炙している前者をとりました。良く似た話でどちらをとるか決めかねたときは、歴史をしらべて、事実に近いほうの方をと